

むかし、庄屋しやうやの家にひとり娘がありました。その娘に婿むこをむかえて、仲良なかよく暮らしていました。ところが、いつからか、娘は、夫のことが何となくいやになって、しまいいは顔を見るのさえいやになりました。

ある日のこと、娘は、村はずれに住んでいる占うらない婆ばあさんのところへ相談に行きました。「おはずかしい話ですが、わたし、夫のことがいやでいやで、困っています。顔を見るのさえいやなのです。どうかして、夫の顔を見ずに過ごすことはできませんまいか」とすると、占うらない婆ばあさんはいいました。

「それはわけのないことだ。よいことを教えてやろう。月のよい晩に糸をつむぎ、その糸で月のよい晩に布を織おり、その布を月のよい晩に月の光にさらし、その布で月のよい晩に着物を縫ぬい、その着物を月のよい晩にご亭主ていしゆに着せてやれ」

娘は、大喜びでそのとおりにやってみました。月のよい晩に糸をつむぎ、次の月のよい晩に布を織り、その次の月のよい晩に布をさらし、次の月のよい晩に着物を縫い、その次の月のよい晩に夫に着せかけました。すると、夫は、その着物を着たまま、ふらりと家を出て、それつきり帰って来ませんでした。

娘は、気味きみが悪くなつて、占うらない婆ばあさんのところに相談に行きました。すると、ばあさんは、「それじゃあ、次の月のよい晩の丑うし三さんつ時に、六道むだうの辻つじに行つて立っていらん」といいました。

満月の晩、娘は、六道の辻に行つて立ちました。あたりは、しんと静まりかえり、月の光が青白く照っていました。そこへ、道のむこうから白いものが、ふわふわと近づいてきました。じつと見つめると、それは、まぎれもない自分の夫でした。夫は、月のよい晩に着せてやった着物を着て、娘の前を通り過ぎながら、ささやくような細い声で、

「月の夜ざらし知らで着て 今は夜神よがみの供ともをする」  
こう唱なえて、またふわりふわりと闇やみの中に消えていったそうです。

おしまい